

文部科学省「地（知）の拠点整備事業」（大学COC事業）

平成28年度
中部地区COC事業採択校
学生交流会
報告書

CONTENTS

目次

はじめに	2
概要	3
発表テーマ	4
評価	5
アンケート結果	6
ポスター紹介	
香川大学	12
金沢工業大学	13
岐阜大学	14
皇学館大学	15
滋賀県立大学	16
静岡大学	17
中部大学	18
富山県立大学	19
名古屋学院大学	20
日本福祉大学	21
福井大学	22
三重大学	23
参加大学所在地一覧	24

はじめに

「中部地区COC事業採択校学生交流会」は、平成25年にCOC事業採択後、岐阜大学が幹事校となり、中部地区を中心としたCOC事業採択校情報交換会で培われた連携のもと、大学を超えて学生が互いに刺激し合う学びの場である。

「中部地区COC事業採択校情報交換会」は、岐阜という地理的な利便性を活かして、岐阜大学が中心となり近隣の大学に呼びかけたことで、平成25年度には8大学、26年度には13大学、平成27年度は13大学の参加があり、多くの大学の賛同を得ることができた。この情報交換会では、相互に事業計画や事業進捗を報告し意見交換を行うことで、各大学の教育プログラム等の課題や改善点を自身の取組みに反映させることができるなど、大変有意義な場となっている。このように中部地区の大学間連携を密にするなかで、平成26年度の情報交換会で岐阜大学と金沢工業大学の提案により、各大学の学生が集いそれぞれの地域での活動や取組みを発表し合う学生交流会を企画、実施するに至った。

平成28年度の中中部地区COC事業採択校学生交流会は、平成29年3月1日にJR岐阜駅前のじゅうろくプラザにて、岐阜大学及び金沢工業大学が幹事校となり開催された。参加大学は、中部地区を中心とした近隣の大学に加え、特別参加として初回から引き続き参加した香川大学の計12大学であった(参加者100人)。同学生交流会は、参加大学の学生が集結し、平成28年度の活動(グループ活動やプロジェクト等)についてプレゼンテーション及びポスターセッションを行い、他大学の学生同士が互いに発表し合うことで刺激し合い、今後の学生による地域での活動や取組みの促進を図る機会となった。平成29年度以降も、引き続き学生交流会を開催し、中部地区における独自のネットワークを強化しながら、地域志向教育の拠点へと発展させていきたいと考えている。

平成28年度
中部地区COC事業採択校
学生交流会

発表校
岐阜大学・金沢工業大学・皇学館大学・滋賀県立大学・
静岡大学・中部大学・富山県立大学・名古屋学院大学・
日本福祉大学・福井大学・三重大学・香川大学 (特別参加)

12
大学の精鋭が集結!

平成29年3月1日(水)
13:30~17:15

入場
無料
事前申込み必要

会場	じゅうろくプラザ大会議室 (岐阜県岐阜市橋本町1-10-11)
対象	地域・自治体・企業・教育・一般
内容	13:30~13:40 開会挨拶 13:40~13:50 来賓挨拶 13:50~16:30 各大学代表学生による発表(12大学) 16:30~17:00 ポスターセッション(各大学の代表学生による) 17:00~17:10 議評 17:10~17:15 閉会挨拶
申込方法	地域協学センターWEBサイト、参加申込ページより (http://www.ccsc.gifu-u.ac.jp/ccsc/index/entry_list)
申込期限	平成29年2月27日(月)

CCSC 地域協学センター
TEL.058-293-3168
FAX | 058-293-2022 | E-Mail | ccsc@gifu-u.ac.jp
URL | <http://www.ccsc.gifu-u.ac.jp>

幹事校 岐阜大学 金沢工業大学

地域(知)の拠点



平成28年度中部地区COC事業採択校学生交流会概要

今回で3回目の開催となる中部地区COC事業採択校学生交流会は、中部地区を中心としたCOC事業(またはCOC+事業)採択の計12学の代表学生が、グループで取組んだ地域での活動やその成果を学生・大学関係者、地域の方々及び企業関係者などに向けて発表を行った。あわせてポスターセッションでは、参加した学生同士だけでなく、学生と参加者(大学教職員等)が活発な意見交換を行うことができ、多様な参加者の交流の場となった。学生交流会をとおして、各大学はCOC事業の取組みを広く発信することができ、また、学生は他大学との学生と地域活動などに関して意見を交わしながら交流を深めることで、互いに刺激し合いこれまで以上に学生たちが地域での活動を発展的に取組むことが期待できる場となった。また、口頭発表やポスターセッション後の情報交換会では、参加大学の学生や教職員が、和やかな雰囲気のもと互いの発表や日頃の活動や取組みについて語り合う場となり、より一層交流を深めるとともに、絆も深めることができた。

[日 時] 平成29年3月1日(水) 13:30～17:15

[場 所] じゅうろくプラザ(岐阜市)

[参加大学(発表順)]

香川大学、金沢工業大学、岐阜大学、皇學館大学、滋賀県立大学、静岡大学、中部大学
富山県立大学、名古屋学院大学、日本福祉大学、福井大学、三重大学(計12大学)

[参加者数] 100人(内訳:学生43人、大学教職員51人、一般・来賓6人)

[プログラム]

1. 開会挨拶 岐阜大学理事・副学長 福士秀人
2. 来賓挨拶 羽島市政策参事兼人材育成担当監 成原嘉彦氏
3. 各大学代表学生による発表(1大学発表8分 質疑応答2分)
4. 取組み・活動に関するポスターセッション
5. 講評 金沢工業大学工学部教授 佐藤恵一氏
羽島市政策参事兼人材育成担当監 成原嘉彦氏
6. 閉会挨拶 岐阜大学地域協学センター長 益川浩一

[情報交換会(交流会)] (17:30～19:00)69人出席

発表テーマ

発表順	大学名	テーマ・概要
1	香川大学	屋島山上ちようちんカフェの挑戦 香川大学では自治体と連携して地域の問題解決に向けたプロジェクト型の授業を実施しており、今回発表する内容は高松市と連携した観光振興プロジェクトである。高松市の代表的な観光地である屋島であるが、年々観光客は減少しており、若年世代からすれば古い観光地として認識されている。この屋島を新しいイメージでPRするために、高松市の伝統工芸である讃岐提灯を活用したプロジェクトを推進している。今回は「屋島山上ちようちんカフェ」の取り組み内容と成果について発表する。
2	金沢工業大学	こどもの成長を見守る「おもちゃ」開発プロジェクトの紹介 金沢市内の幼稚園から「絶対音感を鍛えることができるおもちゃ」「言葉を覚えるおもちゃ」「指使いを器用に使うおもちゃ」「幼児の謎行動の分析」の4項目を開発してほしいまたは、解析をしてほしい要望があった。本プロジェクトでは、これらを6チームに分けて開発を行ったので、その成果を発表する。
3	岐阜大学	中津川市阿木地区「特産安岐そば・シクラメン祭り」花冠ワークショップの実施 岐阜県中津川市阿木地区で毎年、開催される「特産安岐そば・シクラメン祭り」を地域の人たちと協働でリニューアルするため、新たな企画を提案した。阿木の魅力をより多くの人に知ってもらうこと、若い世代・家族連れなどの客層を呼び込むことを目的として、学生がこれまでにない新しい取り組みである「シクラメン花冠ワークショップ」を企画提案し、実施した。
4	皇學館大学	皇學館大学学生フューチャーセンター「皇學館みらい対話団」 地域課題について学び、対話を通じて人と人がつながる場を作り出す取り組み。
5	滋賀県立大学	沖島の活動を通して 琵琶湖に浮かぶ、日本で唯一の淡水湖の有人島、沖島。そこで、近江楽座「座沖島」として学び、交わり、支える活動を行う傍ら、「沖島湖さんぽ」という事業名で、ビジネスプラン・アイデアコンテストで受賞するなど、自身と地域との関わり方を、暮らしと生業の観点から発表します。
6	静岡大学	1年目の地域創造学環 平成28年度に発足した静岡大学の全学教育プログラム「地域創造学環」の特徴は、1年生から静岡県内の13テーマに分かれてフィールドワークを展開し、地域の課題に触れ、その解決のための実践的活動に取り組んでいることです。本報告では、初年度である28年度の活動内容や学生がフィールドで学んだことや今後の展望について発表します。
7	中部大学	春日井市消防団中部大学機能別分団の発足 春日井市消防団中部大学機能別分団は、将来の消防防災活動の担い手の育成や消防団活動の活性化を目的として、春日井市消防本部と中部大学の合意の下に発足しました。中部大学は災害時の「広域避難場所・指定避難所」であることから、大規模災害発生時に大学構内における避難住民の誘導やケガ人の手当て、支援物資の配給など避難所運営の支援を主な任務とします。今回の交流会では、我々の活動を中心にご紹介します。
8	富山県立大学	学生が輝く地域活動 富山県立大学にはCOC事業を行った学生団体がいくつもあります。そしてそれぞれが輝いています。そんな僕ら学生の活動事例や苦労話、活動理由などについてお話ししたいと思います。
9	名古屋学院大学	失敗を恐れずにチャレンジ!-減災福祉まちづくりの段階発展的学びのプログラムに参加して- 座学と演習からなる本学の段階発展型プログラムについて、実際に段階発展的に履修した学生から、失敗を含めた学びと成長について報告する。
10	日本福祉大学	「紙芝居で広げる認知症と家族の輪」 日本福祉大学社会福祉学部地域志向科目「地域研究プロジェクト」で、「認知症啓発プロジェクト」に所属し、認知症啓発のための「紙芝居」の制作し、地域において上演活動を行った。プロジェクトは、愛知県東海市にあるNPO法人Heart to Heartや、ユニー・ファミリーマートホールディングス株式会社の協力を得て、進めている。
11	福井大学	中山間地の既存建築物を生かした「場」のデザイン 福井県内の中山間地域で学生主体により行っている空き家や公共施設の活用・改修を通じたプロジェクトの内容を発表する。
12	三重大学	三重県木曽岬町での中学生・大学生・役場職員の地域発見プログラムに関して 三重県北部地域に位置する人口6,500人の町である木曽岬町(キソザキチョウ)にて、地域の担い手育成の事業の一環として、中学生を軸として、大学生・役場職員が協働する地域発見プログラムを実施している。過日実施した中学生を対象としたアンケート調査にて、将来地元に戻って来たいとの回答した生徒は1割しかいなかった。地域社会の継続には大きな課題を抱えているため、その対策として「地域の魅力を知らないからではないか」との仮説を立て、実際に地域活性化へ尽力する大人達を中学生の目線で取材する活動を実施している。

評価

学生交流会では、各大学の口頭発表に対して、参加大学の教職員及び来賓の13人が評価員となり、その特徴や特色について評価を行った。当日は金沢工業大学の佐藤恵一教授が 評価員長となり、評価結果と講評を行った。

〈目的〉

各大学の学生の活動に対して多様な視点からそれぞれの特色を評価する。今回の評価は、学生発表の順位付けではなく(相対評価ではなく、絶対評価とする)、参加学生らが自身の活動に対する客観的な評価を互いに知ることにより、今後の活動に学生自身が主体的にこれまで以上に取組めるなど、学生の教育的な効果を目的とし、下記の要項に沿って評価を行う。

〈評価員〉

評価員長：佐藤恵一 金沢工業大学教授

評価員：11大学(金沢工業大学を除く)から各1名を選出、来賓1人

〈評価方法〉

評価員長および12人の評価員の計13人で評価する。評価員は各大学の口頭発表(8分間)の内容に対して最もふさわしいと思われる特色を下記5項目の中から1つ選ぶ。

〈評価項目〉

- ・「独創性」：独創的な着眼点・アイデア、発想の面白さ
- ・「モデル性」：他大学や他地域に応用できる取組み
- ・「地域性」：地域の特色を生かした取組み
- ・「調査・研究力」：専門性の活用。着実な調査・研究にもとづく取組み
- ・「グループ力」：グループのチームワーク力、地域との連携力

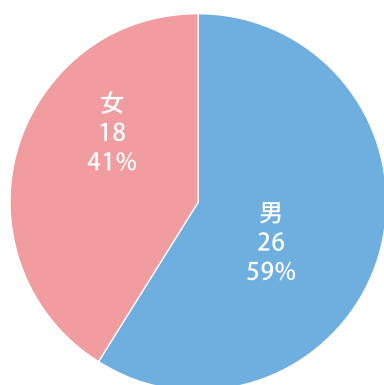
〈評価結果〉 ※下記は各大学が主に評価された項目を掲載している。

発表順	大学名	主な評価項目	発表順	大学名	主な評価項目
1	香川大学	地域性	7	中部大学	調査・研究力
2	金沢工業大学	調査・研究力	8	富山県立大学	グループ力
3	岐阜大学	地域性	9	名古屋学院大学	モデル性、グループ力
4	皇學館大学	モデル性、グループ力	10	日本福祉大学	独創性、調査・研究力
5	滋賀県立大学	地域性、グループ力	11	福井大学	調査・研究力
6	静岡大学	モデル性、地域性		三重大学	モデル性

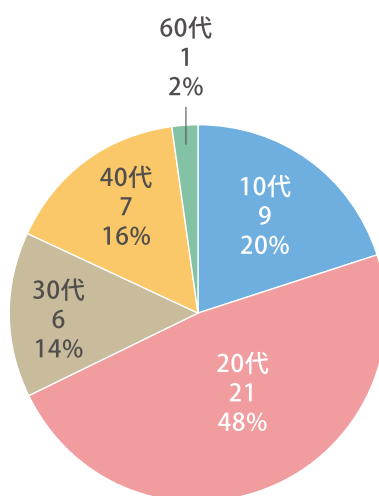
平成28年度 中部地区COC事業採択校「学生交流会」アンケート結果 (H29.3.1実施)

参加者数100、回答数44(回答率44%)

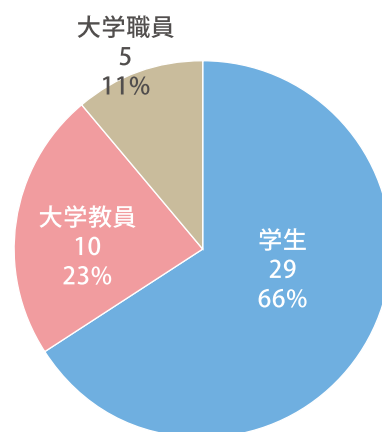
1.性別



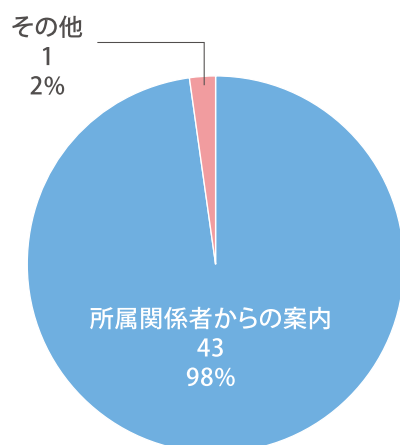
2.年齢



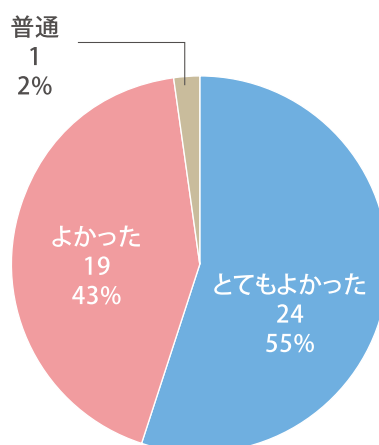
3.所属



4.「学生交流会」を何で知ったか



5.「学生交流会」全体の感想



6. どの大学の発表(プレゼンテーション)が最も印象に残ったか

①滋賀県立大学 10人

(理由:活動にかける熱意 1人、学生のアグレッシブさには驚かされる 1人)

②日本福祉大学 7人

(理由:紙芝居が参考になる 3人、地域で役に立つ取り組みをしている 1人)

③香川大学 6人 (理由:自分の大学と似た取り組みをしている 1人)

以下 中部大学 5人

富山県立大学 4人

金沢工業大学 3人 ほか

7. ポスターセッションではどの大学が最も印象に残ったか

①滋賀県立大学 8人

②日本福祉大学 5人

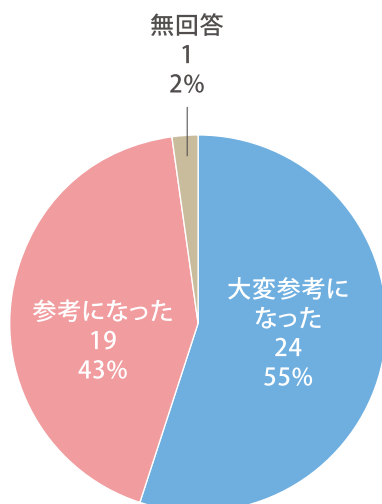
(理由:学生の丁寧な説明 1人、紙芝居や資料が多い 1人)

②福井大学 5人

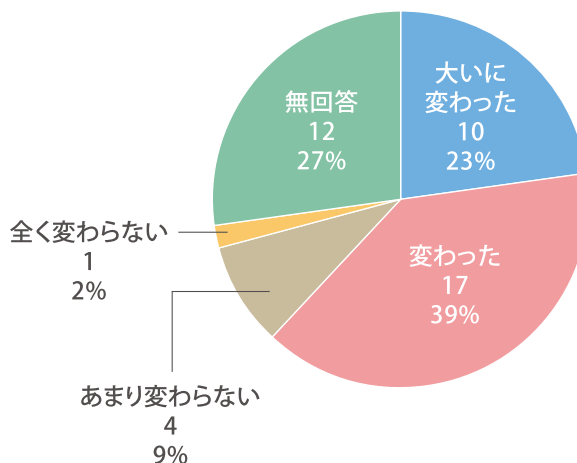
(理由:空き家を利用した取り組みが興味深い 1人、活動の様子がよくわかる 1人)

以下 香川大学、富山県立大学 いずれも4人 ほか

8. 「学生交流会」は今後のあなたの 取り組み(研究、地域活動、業務など)の 参考になったか



9. 「学生交流会」の参加前と比べて、地域に対する 意識や地域活動への意欲は変わったか (学生のみ回答)



○具体的にどのような意識や意欲の変化があったか(自由記述)

①視野の広がりに関する記述

- ・具体的な目的や課題の早期発見やその解決に向けて行動ビジョンが見えました。
- ・新たな分野にとりかかろうと思いました。
- ・滋賀県大の島を活性化させようという発表をきいて、このプロジェクトを立ち上げたモチベーションが「島の人たちに感動したから」というのに感銘をうけて、そのまま島にすんでしまうという発想が起る環境が滋賀県大にあるのがすごいと思い、是非自分の大学でもそのような生徒が積極的になれる環境ができればいいなと思いました。
- ・地域づくりに様々な形でも関わり方があることを知り、大変視野が広がった。

②意欲の高まりに関する記述

- ・地域との交流、人との関わり大切さを改めて知り、自分から積極的に関わっていきたくて思いました。
- ・所属するチームの今後の取り組みについて、取り入れたいと思うものが多くあり、活動に積極的に取り組む意欲がわいた。
- ・地域からの要望や意見に耳を傾ける姿勢が学生間に定着したため参加意欲が変わった。
- ・他大学の様々な取り組みに刺激され、自分たちももっと頑張ろうと思えた。
- ・自分たちは他大学と比べて一番進んでいると思っていたが、むしろ自分たちより進んだ取り組みをおこなっている大学が多かったことに驚き、意識高まった。
- ・他の大学での地域活動をしていて、自分も他大学に負けなくらい地域活動をしていき、自分だけではなく組織全体が盛り上がるよう、意識改革をしていきたいです。

③活動の参考になった等の記述

- ・積極的に地域参加していきたくて考えており、そのやり方として参考になる話を聞けたから。
- ・地域活動を自分たちが関わらなくなったら知らないふりをするのではなく、今後どのように発展させていくのか考えることができ、これまでかかわった地域活動を振り返り改善していく必要があると思いました。
- ・参加された大学の活動を今後似たようなものがあつたときに、参考にし、活動できる。
- ・いろんな考えや取り組みを知ることができた。
- ・他大学の活動も知れたし、もっと行ってもよいと思いました。
- ・それぞれの地域の特徴や課題を持ち、自分たちの地域をよりよくして行こうといった気持ちがそれぞれあり、自分たち以外にもたくさんの地域が取り組んでいて、すごく良い刺激になりました。
- ・自分と同じ、又はもっと発展した活動をしている人たちの話を聞いて刺激を受けた。
- ・同じ大学生なのに、自分よりすごい人たちがたくさんいて、とても刺激になった。参考にできる部分も多かったのも、これからの活動の励みになったと思った。
- ・どの大学も「地域」に関する拠点や問題点があり、自分たちと同じような壁にぶつかったりして今後の活動の励みになった。

④その他

- ・あらためて地域を考える機会になりました。
- ・学生と地域が交流することにより、学生だけではできない大きな企画を立てることができるという魅力があり、地域と交流していくことはとても大変なことだと強く思うようになりました。
- ・普段、他大学の活動を知る機会が少ないため、このような場で知ることができるのはとても良かった。また、知るだけでなく、学生と関わることで意見交換もでき、新しい視点で考えることに気付いた。

10.その他質問、意見等

- ・各大学の取り組みが参考になりました。学生にとってとても刺激になる場になってとても有難く思いました。
- ・学生どうしの交流の場を設けることは大変有意義だと感じました。学生の活発な交流がとても印象的でした。
- ・大変勉強になりました。ありがとうございました。



香川大学の発表



金沢工業大学の発表



岐阜大学の発表



皇学館大学の発表



滋賀県立大学の発表



静岡大学の発表



中部大学の発表



富山県立大学の発表



名古屋学院大学の発表



日本福祉大学の発表



福井大学の発表



三重大学の発表



ポスターセッションの様子(1)



ポスターセッションの様子(2)



ポスターセッションの様子(3)



ポスターセッションの様子(4)

参加大学 ポスター紹介

香川大学 P12

屋島山上ちようちんカフェの挑戦

金沢工業大学 P13

こどもの成長を見守るおもちゃ開発プロジェクト

岐阜大学 P14

中津川市阿木地区『特産安岐そば・シクラメン祭り』
花冠ワークショップの実施

皇学館大学 P15

皇学館みらい対話団

滋賀県立大学 P16

近江楽座 座・沖島の取り組み

静岡大学 P17

1年目の地域創造学環
～佐久間でのフィールドワークを例に～

中部大学 P18

春日井市消防団中部大学機能別分団の発足
～地域と防災について～

富山県立大学 P19

地域で輝く学生～学生自主プロジェクトを通して～

名古屋学院大学 P20

失敗を恐れずにチャレンジ!
～減災福祉まちづくりの段階発展的学びのプログラムに参加して～

日本福祉大学 P21

紙芝居で広げる認知症と家族の輪

福井大学 P22

中山間地域の既存建築物を生かした「場」のデザイン

三重大学 P23

木曽岬活性化プロジェクト～木曽岬わいわい市の開催～

屋島山上ちようちんカフェの挑戦

香川大学高松観光振興プロジェクトチーム

経済学部2年 新井笑菜、経済学部1年 高橋このみ、多田安里

概要

ねらい : 高松市と香川大学が連携したプロジェクトで、教育プログラムを通じて地域活性化に貢献することを狙いとしている。(讃岐提灯と連携した取り組みは2年目)

対象地 : 近年観光地として衰退している「屋島山上」を対象とする。

活動内容: 「源平合戦の地、屋島」としてPRされているが、屋島最大の資源である夕夜景が活用されていない。そこで、高松の伝統工芸である「讃岐提灯」を活用することで、屋島の夕夜景を魅力的にみせる活用策を実施した。具体的には、「屋島山上ちようちんカフェ」としてプレオープンを含む計10日間開催した。



教育的な効果・目的

教育目的: 現実起こっている地域課題を自分で把握・発見し、その課題解決に向けた解決策を考案し、実施まで行うことで、地域を活性化するマインドをもった人材育成することが教育上の狙いである。

教育効果: ①地域社会への関心・理解②プロジェクトを運営する社会的スキルの向上③自ら考え行動する主体性の醸成

内容

1、プロジェクトの目的

「讃岐提灯」と「カフェ」をコラボし「夕夜景」が魅力的に体感できる場づくりを目指す

2、屋島の問題点

- ・屋島最大の資源である「夕夜景」が活かされていない
- ・17時以降はお店が閉まる

3、解決に向けたアクション

屋島山上ちようちんカフェ



屋島の夕夜景

讃岐提灯とは?

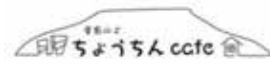
中国から弘法大使が持ち帰り香川で発祥

折提灯

- ・お遍路さんが考案し愛用された提灯
- ・約1000年の伝統があり現在は香川県のみ伝承される日本最古の提灯



交流拠点カフェ



小豆の銀四郎素麺の手延べそうめんを使用



瀬戸内産レモンを使用したドリンクや、地元香川コーヒーショップによる特製カフェオレ



カフェスペースとは別に夜景と提灯のコラボを味わえる「ちようちんの間」をつくる



テーマを「思い出の青」としTwitterで写真を募集しその写真を使った折提灯を展示



讃岐提灯ワークショップも開催



店内の灯りはすべて讃岐提灯のみで飾り良さを知らしてもら



撮影スポットを作り讃岐提灯に親しんでもらえるスペースとした

4、得られた成果

- ・計10日間で1027人のお客さんを迎えることができた
- ・アンケートを実施し、「非常に良い」と「良い」の合計値は95%と非常に高い満足度を得ることができた
- ・ちようちんカフェに来店して屋島の印象が変わったかという項目については「変わった」の回答を72%得ることができた

取り組みで得た学び

- ・屋島の現状を知ることによって地域の抱えているリアルな問題に気付くことができたり、屋島の夜景の魅力に可能性の発見をすることができた。また、讃岐提灯の活用の幅の拡大にもつながった。
- ・讃岐提灯の認知度の向上と共に夕夜景をアピールすることで香川に対しての愛着がわいた。



02 金沢工業大学

こどもの成長を見守る おもちゃ開発プロジェクト

心理情報学科2年 田崎春輔、ロボティクス学科2年 田島和輝

概要

金沢市内の幼稚園のニーズを基に、「子どもが継続して利用したくなるおもちゃ」を中心とした教材やこどもの成長をモニタリングするシステムを提案し開発する。開発したおもちゃを評価し、ユーザである幼稚園児にとって、安全で使いやすいデザインとなるよう改良を繰り返す。

教育的な効果・目的

プロジェクトメンバーは情報工学科、ロボティクス学科、メディア情報学科、心理情報学科という4つの学科(計40名)で構成されている。各々の学科の強みを活かしながら、現場のニーズを解決するという実務的経験と、技術力だけでなく対外的なコミュニケーション能力や技術者倫理、ビジネス的素養も得ることができる。

内容

プロジェクト実施体制



取り組みで得た学び

- ・子どもが対象なので、安全性についてはよく議論したつもりであったが、幼稚園の先生から見ると、配慮の足りない点がいくつも見つかった
- ・立場や専門の知識が違えば、見えてくるものが大きく変わることに気づくことが出来た
- ・その学科では学ばない技術などを身に付けることで自分の視野を広くできた

03 岐阜大学

中津川市阿木地区『特産安岐そば・シクラメン祭り』 花冠ワークショップの実施

河上俊一(地域科学部 3 年)、川脇沙也佳(地域科学部 3 年)、後藤亜依(教育学部 3 年)
渡邊由香里(教育学部 3 年)、丸山純平(地域科学部 4 年)

概要

岐阜県中津川市阿木地区で毎年、開催される「特産安岐そば・シクラメン祭り」を地域の人たちと協働でリニューアルするため、新たな企画を提案した。阿木の魅力をより多くの人に知ってもらうこと、若い世代・家族連れなどの客層を呼び込むことを目的として、学生がこれまでにない新しい取り組みである「シクラメン花冠ワークショップ」を企画提案し、実施した。

教育的な効果・目的

全学的な『次世代地域リーダー育成プログラム』の上級段階の科目であり、地域の中でリーダーシップを発揮できる人材として必要な素養や能力を養うために、実際の地域の課題等に対してより実践的に取り組むものである。

内容

1、企画実施まで

実際に現地を訪れ、フィールドワークを行い、地域の情報収集や地域の方々との意見交換を通して、地域の課題解決に貢献する学生企画を提案した。そこで、地域から斬新なアイデアという評価を受けた特産のシクラメンを用いて阿木を広く知ってもらう花冠ワークショップを実施することになった。参加者が簡単に制作できる花冠とするため地域の支援を受けながら試行錯誤を繰り返し、お祭りを迎えた。

2、企画当日

当日は、園児や小学生を中心に幅広い世代の方々の参加(合計 27 人)があった。特徴は、自分たちで作った花冠を被り、シクラメンで飾ったひな壇を背景に写真撮影をすることでワークショップの思い出を持ち帰ってもらうことができた。

3、地域からの声

地域としても学生が関わることでお祭りを変えていこうという流れになり、学生企画以外にも新たな試みを行うことができ、良いきっかけとなった。

3、地域からの声

メンバー間でのコミュニケーションの不十分だった。
小さい子でも製作できるような工夫が足りなかった。

取り組みで得た学び

地域の方と自分たちの感覚や捉え方が異なるために、地域のニーズに沿った企画を立てることが難しく、地域や地域の方についてしっかり情報を収集することが大切であることを学んだ。そのためには、もっと地域の人たちとの交流を図り、何度も地域に通ったり、長く滞在することで、自分たちの当事者意識をつくるのが大切であることも学んだ。



04 皇學館大学

皇學館みらい対話団

CLL活動、学生フューチャーセンター

概要

「皇學館みらい対話団」では主に伊勢志摩地域の課題を題材に、多様な人達が集い地域の未来について対話する場をつくる活動です。学生主導によるフューチャーセッションを通して場作りや対話の進め方などを学びながら、多様な人々と地域の課題解決について考え合っています。

教育的な効果・目的

フューチャーセッションのプログラムデザインをするプロセスにおいて、地域課題について学びます。さらに、セッションを運営することで、ファシリテーション、リーダーシップをはぐくむことができると考えています。

内容

平成28年度は、4回のオリジナルのセッションを実施しました。テーマはそれぞれ、「どうしたら地元食材をもっと食べてもらえるか」「伊勢志摩の観光」「対話を対話する」「学生の地域活動について」と、身近でかつ、多岐に渡りました。

オリジナルのセッションを開催する以外にも、中学校での中学生対象のワークショップや他県での防災ワークショップをサポートしたり、社会人基礎力グランプリなどのプレゼンの場も幾つか経験しました。

今後は、大学のまちなか拠点の使用方法を考え合うワークショップの企画・実施や防災系のワークショップの実践を通じて、地域課題を学ぶとともに、対話の場作りについて学んでいきたいと思っています。



取り組みで得た学び

対話団で得た経験や興味から、他のプロジェクトに参加したり、就職活動に関して1dayインターンシップを企画・開催したりと、この活動をベースの滑動の幅を広げています。

05 滋賀県立大学

近江楽座 座・沖島 の取り組み

人間文化学部 地域文化学科 2年生 座・沖島代表 久保 瑞季

近江楽座とは About

01

学生が地域課題の解決に向けて
地域の人とともに取り組む地域課外活動

延206プロジェクトに延3961名の学生が参加
(H16~H24)

Aプロジェクト(「地域活性化への貢献」をテーマとする学生主体の地域活動)とBプロジェクト(自治体・企業・団体等から依頼のあった課題に取り組む活動)により実施

1グループ当たり50万円(上限)の活動費を支給するとともに、教員等によるコンサルティングを実施

座沖島の取り組み Work

02

日本で唯一の淡水湖の有人島。
漁業を中心とし、琵琶湖と共に生きる島。

しかし、島民の高齢化率は60%を超える
少子高齢化・過疎化の進む島でもあり、
島をあげて活性化の取り組みを行っています。

「私たち学生も沖島を支えたい。」
そのような思いで座・沖島を発足し、
島民のみなさまの協力をいただきながら
学び、交わり、支える活動をしています。

2016年度の活動 History

03

6月 沖島ツアー

新入生に島の案内。島の紹介だけでなく、婦人会のお手伝いを行うなど島民との交流も意識した。



沖島写真展

8月 夏祭り

島民の方が撮影された写真の個展を開催。「帰省した人に見てもらい、もう一度沖島の魅力に気づいてほしい」合わせて夏祭りのお手伝いも。



11月 湖風祭出店

「湖風祭」にて沖島で獲れたブラックバスを使った「よそものコロケ」を販売。



沖島小遠泳大会 北岸家清掃

7月

遠泳大会のお手伝いと、使わせていただける空き家の清掃を行った。地域の方との交流ができた1日。



9月 写真展出張

同じ近江楽座のおとくらプロジェクトと連携し、喫茶おとくらにて出張展を開催。

9月 ビジネスアイデアコンテスト

沖島の自然を活用した案で、ビジネスアイデアコンテスト最優秀賞を受賞。



1月 佐議長まつり手伝い

私たちの夢 Objective

04

今年度は沖島を理解し、沖島の人と親しくなることを目的としてきた。島での県立大の知名度は上がっていると思う。しかし、「島民側に立ちすぎて客観的な視点を見失っているのでは」という指摘がされた。本来このプロジェクトの目標は「沖島を「学生」が支える」というもの。島民だけでは気付くことができないところを、学生ならではの目線で見えるのも目的。来年度は、学生なりの「支える」を目指したい。

夢をカタチに Business idea

05

沖島湖(うみ)散歩

COC+のアクティブラーニング「大学によるアイデアコンテスト」にて最優秀賞を受賞!



06 静岡大学

1年目の地域創造学環 ～佐久間でのフィールドワークを例に～

1年 伊神翔央汰・梅田和典

概要

地域創造学環:今年度からスタートした地域創造学環には大きな特徴が2つある。1つは静岡大学のすべての学部の授業を履修することができることであり、もう1つはフィールドワーク等を通して積極的に地域に飛び出して学んでいくことができることである。このフィールドワークは1年後期から3年後期、さらには卒業研究として4年次まで継続しておこなわれる。そこで今回はこの2つの特徴の内のフィールドワークについて1年次では何をおこなっているのかを佐久間地域を例に見ていく。

佐久間地域:浜松市天竜区に位置する中山間地域である。昭和31年には2万人いた人口はここ60年で4千人に減少してしまった。しかし来年度完成予定の三遠南信自動車道ICや現在進行中のアワビプロジェクトなどで地域が変わっていく契機となる可能性がある。

活動内容:この地域の支えになっているNPO 法人がんばらまいか佐久間や行政の方とともに、移住者増加や地域活性化の実現を目指してフィールドワークをおこなっている。平成28年度の後期では「地域の課題や資源知る」を活動のテーマとして8人で1泊2日のフィールドワークを計3回実施した。



静岡大学地域創造学環のフィールドワーク実施地域

教育的な効果・目的

地域(フィールド)が抱えているさまざまな問題に対処するための実践的な学習を積み重ねていくことで、学問を学びつつ、コミュニケーション力や主体行動力など、実社会で必要な能力を育成する。またより魅力的な地域社会の創造に取り組むことができる人材を育成する。

内容

行程

第1回佐久間地域を理解する

- ・中山間地域の佐久間が抱える課題、過疎地における行政の役割を知る
- ・コミュニティ機能を調べる(まちあるき)
- ・高齢化社会を支えるNPOがんばらまいか佐久間の取り組みを知る

第2回佐久間の人々にヒアリング

- ・地域おこし協力隊に佐久間の魅力を聞く
- ・佐久間在住者やイベント参加者に佐久間の印象を聞く
- ・佐久間で飲食店を営んでいる方に現状を聞く

第3回意見交換と今後に向けて

- ・特産品開発(アワビの養殖実験)と新そばまつりへの参加
 - ・地域おこし協力隊と行政の方と意見交換をする
- 佐久間ダム電力館の活用方法を考えて欲しいという具体的な要望を聞くことができた

成果

1年後期でおこなったフィールドワークではNPOや行政の方から佐久間地域外の方まで幅広い方からお話を聞くことが出来た。その話の内容としては佐久間の現状や地域住民が必要としているものや大学に求めるものなどであり私たちが聞きたかった話を十分に聞くことができた。これに加えて2日間かけて佐久間のまちあるきをおこなったことで佐久間に関する知識をかなり付けることができた。

取り組みで得た学び

地域住民が望んでいることを実現するには地域住民と大学側の目標を一致させる必要があり、地域住民と大学ともに当事者意識を持つ必要があることがわかった。また実際に地域に赴くことでしか手に入らない情報が多数存在し、その情報は地域を良い方向にもっていくためには必要不可欠であることも学んだ。

今後

まずは私たちがやろうとしていることが間違っていないか確認するために地域住民の方とワークショップをおこなう。その上で第3回の意見交換をおこなった際に出た地域おこし協力隊と連携して佐久間ダム電力館の活用方法を考えることから始めようと考えている。また8人をいくつかのグループに分け、興味関心が強い分野に力を注ぐことも検討中である。



07 中部大学

春日井市消防団中部大学機能別分団の発足 —地域と防災について—

井戸 太貴、中村 優志、太田 真司（生命健康科学部 スポーツ保健医療学科）

概要

中部大学は災害時の「広域・指定避難所」であることから、大規模災害発生時に大学構内における避難住民の誘導やケガ人の手当て、支援物資の配給など避難所運営の支援を主な目的とし平成28年5月に春日井市消防団中部大学機能別分団が発足した。平常時は市の総合防災訓練や市消防本部主催の消防出初式といった行事に参加するほか、消防職員と連携し、応急手当などの普及活動を実施し地域住民にとって必要な存在である。

教育的な効果・目的

大学生がボランティア活動として、地域防災の重要な役割の担い手である消防団活動に参加することは、消防団活動の重要性を地域住民に積極的にPRし理解してもらうことも重要な役割であるが、地域貢献といった点においても意義深く、活動を通じて防災に対する興味や関心を持つことにより、将来の地域防災の担い手となることや、今後消防団の基本団員として活躍することを期待している。

内容

●春日井市総合防災訓練

春日井市で開催された市総合防災訓練に参加し防災関係機関から輸送された救援物資を、我々中部大学機能別分団員と中学生、高校生、春日井手話サークル連絡会と安全・安心まちづくりボランティアさんと協力して避難所へ輸送する訓練や、市民を会場まで避難誘導する訓練、地震によって負傷した要救助者に対して応急手当を実施し、救護所まで搬送する訓練を行った。

●春日井市消防出初式への参加

平成29年春日井市消防出初式に参加し、消防職員、基本分団員とともに分列行進を行ったり、催し物でチラシや我々の活動を紹介したりし消防団活動の重要性を地域住民に積極的にPRした。

●避難所運営訓練

中部大学は災害時の「広域・指定避難所」であることから、大規模災害発生時に大学構内における避難住民の誘導やケガ人の手当て、支援物資の配給など避難所運営の支援を主な目的としており、有事の際は避難所の開設をスムーズに行える必要があるため、市消防職員とともに学内に常備してある物資などを定期的に確認し、災害を想定した訓練を実施している。



取り組みで得た学び

今後、中部大学機能別分団の活動から育った学生が、地域防災の担い手として地域の先頭に立ち地域防災に貢献し、大学と春日井市にとって非常に大きな資源になることが期待できる。

08 富山県立大学

地域で輝く学生

～学生自主プロジェクトを通して～

学生自主プロジェクト



富山県立大学では「学生自主プロジェクト」という、学生が地域活性化に向けた活動ができる仕組みがあります。何か地域に向けた事業を行いたい学生（団体）が、学校に事業についてプレゼンを行います（事業費含む）。それぞれの事業に対して審査を行い、審査の通った活動に対し事業費を払う仕組みです。（予算は地域志向研究費より）

目的

課題解決力向上



コミュニケーション能力向上



「学生自主プロジェクト」は、地域課題の発見や解決に向けた学生団体の主体的・積極的な取組を支援します。学生の地域課題への関心を高め、自治体、企業又は地域団体等と協働して、学生の視点を取り入れた課題の発掘や、地域課題解決に向けたフィールドワークの実施、研究成果の地域への還元などにより、持続的に地域活性化に貢献するとともに、学生自身のコミュニケーション能力や課題解決力の向上を図ることを目的としています。

活動事例

地域協働研究会COCOS「いみず祭り」



地域協働研究会COCOSは大学がCOC事業採択後に立ち上げた学生団体で、理念は「地域の課題を地域の方とともに解決する」「COC事業を5年間のCOC事業整備後も、活動できるように貢献する」です。

今年度COCOSが行った活動の中に「いみず祭り」があります。この祭りは県立大学がある射水市の10周年を機に、射水青年会議所が主体となって昨年開催された祭りで、様々な視点から射水市の魅力の再発見、そして再構築を目的としています。COCOSは祭りのイベントの一部を企画の段階から任せていただき、流しそうめんとエンドロールを行いました。流しそうめんについては食を通じて射水市をつなぐことを目的とし、市の食材を使ったそうめんを提供し、また祭りの核である「射水のじた総踊り」を意識した竹のモニュメントの作成をしました。エンドロールについては「参加者全員で祭りを作りあげた」ということを実感してもらいたいという思いで行いました。当日に撮影を行い4分ほどの動画を作成し、会場のスクリーンで流しました。終了後には大きな拍手をいただくことができました。

天文部 黒部峡谷鉄道「星空トロッコ」



黒部峡谷鉄道には星の解説員がおらず解説員として声がかかったのがきっかけで関わり始めました。今年は解説員とPR用の星空写真の撮影も行いました。自分たちの星空に関する知識や撮影技術が役に立ったこと、そして新聞やSNSに自分たちの活動が乗ったことが嬉しかったです。（天文部より）

旧 榎原ゼミ「小矢部PR事業」



ドローンを使って富山県小矢部市のPRを行う。少人数授業であるゼミから、授業後も継続し小矢部市とかかわり続けている。授業後も地域と関わり続けることによって、だらだらと過ごすのではなく充実した時間を過ごせることが良かったです。（旧 榎原ゼミより）

09 名古屋学院大学

失敗を恐れずにチャレンジ!

ー 減災福祉まちづくりの段階発展的学びのプログラムに参加してー

現代社会学部2年 栗木悠多

概要

座学と演習からなる本学の段階発展型プログラムについて、実際に段階発展的に履修した学生から、失敗を含めた学びと成長について報告する。

【挑戦】外部資格／講座運営

【解決のための提案】上級まちづくり演習

【課題発見とフィードバック】減災福祉まちづくり演習

【知識の土台】減災福祉まちづくり学

教育的な効果・目的

座学で得た知識を、演習①で体験的な知識に結びつける。現実の地域社会へ出かけることで課題発見力と想像力を高め、地域へフィードバックをおこなうことで表現力を養う。演習②では、発見した課題について、解決に資する提案をチームによって一般化したかたちでおこない、協力と合意形成の手法を体験的に学ぶ。

内容

①知識を蓄える(減災福祉まちづくり学)

災害について学んだり、自分だったらどうするべきかを座学により詳しく学ぶ。

自分の防災に対する意識を変えることができる。

②現場での発見(減災福祉まちづくり演習)

実際に高齢者の方のインタビューやまちあるきを行う。

現場に出ることでその地域の現状や課題などを再認識する。

③相手への提供(上級まちづくり演習)

学生が主体となって防災講座を企画・運営をする。

講座を開くことで地域の方に防災の知識を知ってもらうことができ、提供する側も双方向のコミュニケーションの大切さなどを学ぶことができる。

④さらなる高みへ(外部資格)

授業以外でもボランティアコーディネーター養成講座やボランティア検定など様々な資格があるため、さらに防災について深く学ぶことができる。



取り組みで得た学び

私は授業を通じて失敗しても何度でも挑戦して次に繋げる自信がついたとともに、自分は一人ではなく周囲に支えられていることに気づき、双方向のコミュニケーションの大切さを学んだ。また地域の課題についても分かることができたので今後も挑戦を続け、学生だからこそできる支援をしていきたいと思う。

10 日本福祉大学

紙芝居で広げる認知症と家族の輪

社会福祉学部 認知症啓発プロジェクト

2年 磯村亜美 織田あさひ 加藤美咲 福田萌子

概要

認知症は、高齢者の増加に伴い誰にも身近な問題となりつつある。厚生労働省「認知症施策推進総合戦略」によると、認知症の人と予備群を合わせると2012年に462万人(約7人に1人)、2025年には、約700万人(約5人に1人)になると推計されている。また、認知症の人を単に支援の対象としてみるのではなく、認知症の人が住み慣れた地域で自分らしく暮らしていける社会の実現を目指している。本プロジェクトは、認知症の人が次世代を担う子ども達にこそ、認知症について知るきっかけや、正しい理解を身につけ優しく接してほしいという想いから、紙芝居「ぼくのおじいちゃん どうしたの?」を作成し、認知症の人と家族の会愛知県支部と連携をして認知症啓発活動を行ってきた。



教育的な効果・目的

認知症の人と家族の諸問題に関する啓蒙・啓発をテーマにして、学生自らが企画したプロジェクトをグループに分かれて実施・運営する中で「主体性」「課題の発見力」「成果の発信力」を身につける。

内容

- ・認知症と家族の会様が作成したオリジナルキャラクターを基に、学生がストーリー・絵コンテを作成。ストーリーの構成には認知症と家族の会様から意見を頂き、より子どもたちに分かりやすいものにした。
- ・出来上がった絵コンテをプロのイラストレーターに描いて頂き、台本と合わせ紙芝居を完成させた。
- ・完成した紙芝居は認知症啓発イベント(東海市アピタ荒尾店)や地域サロンでのイベント(知多市南粕谷ハウス)にて上演した。
- ・開発やイベントの様子をメディアにも多く取り上げられ、各地域から問い合わせを受けている。
- ・今後は紙芝居をイベントや学校で活用し、啓発を続けて行くことが目標。
- ・来春、認知症サポーターのイベントに協力する。



取り組みで得た学び

紙芝居作成やイベント参加には多くの地域の方々のお力添えがあり、人々の繋がりの大切さを実感した。開発では学生自らが行動を起こし、活動を行っていくので主体性や積極性、チーム内で連携する協力性が身についた。活動で得た経験はこれからの研究にも生かしていきたい。

11 福井大学

中山間地域の既存建築物を生かした「場」のデザイン

工学研究科建築建設工学専攻1年 尾野加朱実 小林真央

概要

中山間地域における地域活力の維持・向上に貢献すべく、「空き家を使った活動拠点づくり」「使われなくなった保育所の活用」「地元レストランの新たな展開」といった活動実践を通じ、既存建築物の活用方策を提案する。

教育的な効果・目的

参加学生は、プロジェクトを通じて地域の現状を知り、学外関係者との交流を通じてコミュニケーション能力や調整能力を涵養する。また、建築や都市計画、まちづくりを学ぶ学生にとって、空き家の修繕や施設の活用・改修といった実務的でタンジブルな経験を重ねることにより、大学内の教育で得た知識を生きたものとして身につける。

内容

1. 空き家を使った活動拠点づくり

伝統的な造りの空き家を段階的に改修する。地域の方々に指導してもらうことで、暮らしの知恵や技を学ぶ。土間たたき、部分的修繕、不要物の処理などを行った。研究室の学生らが中心となって行っているが、今後は徐々に他の学生や地域住民などにも参加者を拡大する予定である。



2. 使われなくなった保育所の活用

閉所から10余年たつ保育所を貴重な地域資源と捉え、その使い方を考え、提案し、伝えていくきっかけづくりとして、フリーマーケットを開催した。地域住民と共に実行グループを結成し、企画から事前準備、当日の運営を行った。



3. 地元レストランの新たな展開

高齢化の進む地区に、地元の女性たちが運営するバイキングレストランがある。その新たな活用方法として、カフェを増設する計画を作成した。予算の範囲内で提案にどこまで近づけることができるか現場で職人と打ち合わせを繰り返し、レストランを運営する方々の意見も取り入れている。地元職人と県外学生による解体工事が始まっており、3月のリニューアルオープンを目指している。



取り組みで得た学び

職人による指導を受けながらの改修作業を通じて、大学の授業では学べない、より実践的な建築技法を習得できた。また、地域住民との交流により、地域の歴史や課題を知ることができ、既存建築物の使い方のみならず、中山間地域における暮らしのあり方について考える機会となった。

12 三重大学

木曾岬活性化プロジェクト ～木曾岬わいわい市の開催～

医学部看護学科 1年 北森輝、人文学部法律経済学科 2年 石橋直也

概要

三重県北部地域に位置する木曾岬町は、人口6,500人の小規模な自治体である。町内には小学校と中学校が各校ずつしかなく、高校進学と同時に町外へ流出する。木曾岬町が中学生へ定住意向のアンケート調査を実施したところ、約9割の生徒が将来地元(木曾岬町)に戻りたくないと回答した。その結果に非常に大きな危機感を抱いた同町は、将来の担い手である若者が地域の魅力を知らないからではないかとの仮説を立て、その検証を事業として実施するに至った。そこで、県内で唯一の総合大学である三重大学と連携し、地域人材育成に関するプログラムを実施するに至った。

教育的な効果・目的

- ・本活動では、地域における将来の担い手である中学生と役場の若手職員に対して、地域資源であるヒトを取材する活動を通して、地域の魅力に気づきを与える事を目的としている。
- ・若者と高齢者とのカタリストとしてキャリア教育に指向性を持つ大学生を加え、グループを組織する事とした。多様な世代でのグループワークを重ねる事により、ピア効果も醸成される。

内容

1. 「木曾岬にぎわい市(仮称)」について

(1) 事前準備

参加する中学生を募集するための説明会を実施し、地域の魅力を引き出す講演会等の企画、運営を行った。

(2) 事前調査

大学生が町の基礎的な知識を得るための研修会の開催及び大学生と中学生と役場職員で編成するチーム(以下、「チーム」)を組織した。

(3) 事前研修

チームが円滑に取材活動を行うためのインタビュー等スキルアップ事前研修会を実施した。

(4) 広報

「木曾岬にぎわい市(仮称)」の告知にあたっては、制作する告知媒体の配布を木曾岬町の広報誌とともに配送することとした。

(5) 実施

大学生は、青空市開催に向けたチームによる取材活動のコーディネート及び開催当日の企画、運営を担当。取材先は青空市への出展見込者を中心とすることとし、大学生と木曾岬町が協議のうえ決定した。青空市でチームが出展者との関わりや地域産業の理解を深められるよう、大学生はチームが出展者の販売等支援をできるようにコーディネートを実施した。

2. 木曾岬まちづくり実行委員会について

「木曾岬にぎわい市(仮称)」の開催を町民主体で継続するため、1.で掘り起こされた人材を中心に、「木曾岬にぎわい市(仮称)」の振り返り会及び多様な主体によるまちづくり活動等の研修会とワークショップ「木曾岬まちづくりセミナー2017」を木曾岬まちづくり実行委員会が中心となり実施した。

取り組みで得た学び

チャレンジする力の醸成:自治体、中学校、大学生、企業家など地域活性化に取り組むステークホルダーと関わることで、多様な視点を獲得することができた。

論理的思考力・行動力の涵養:課題意識や解決方法を考えながら実践する論理的思考・行動力を修得した。実践的なプレゼンテーションスキルや企画力が涵養された。

チーム力の向上:振り返り会を実施し、チーム活動を支えるファシリテーション力やコミュニケーション力が向上した。



取材活動風景

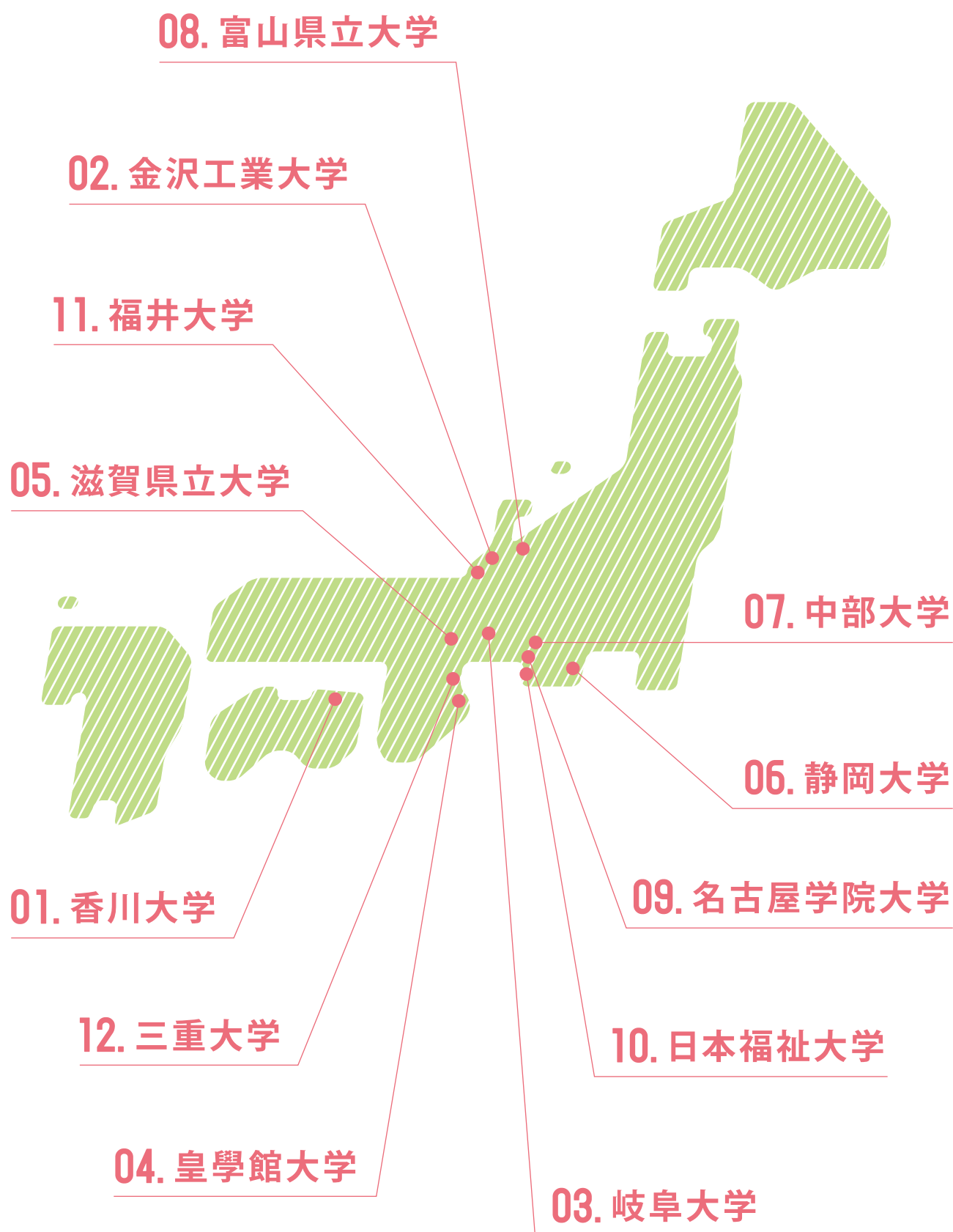


成果発表風景



まちづくりセミナー風景

参加大学所在地一覧



写真で振り返る学生交流会



岐阜大学理事・副学長
福士 秀人



金沢工業大学教授
佐藤 恵一氏



岐阜大学
地域協学センター長・教授
益川 浩一



〈司会〉
岐阜大学教育学部3年
辻 希美さん



〈来賓〉
羽島市政策参事兼
人材育成担当監
成原 嘉彦氏

会場の様子



各大学パネル展示



国立大学法人 岐阜大学

文部科学省「地(知)の拠点整備事業」(大学COC事業)

中部地区COC事業採択校

学生交流会報告書

平成28(2016)年度

編集・発行 地域協学センター
〒501-1193 岐阜市柳戸1-1
TEL .058-293-3168
FAX.058-293-3167
<http://www.ccsc.gifu-u.ac.jp>

発行 平成29年9月

装丁・印刷 canpai design



国立大学法人

岐阜大学

国立大学法人 岐阜大学

〒501-1193 岐阜市柳戸1-1 TEL.058-230-1111(代表)

CCSC 地域協学センター
Center for Collaborative Study with Community



文部科学省

地(知)の拠点

岐阜大学 サテライトキャンパス

〒500-8844 岐阜市吉野町6-31 岐阜スカイウイング37 東棟4F TEL.058-212-0390(代表)

[E-Mail] ccsc@gifu-u.ac.jp [URL] <http://www.ccsc.gifu-u.ac.jp>

TEL.058-293-3168 FAX.058-293-3167

発行：平成29年9月